「ボヴァリー夫人」における
描写にみられる＜時＞について

佐々木　順　子

序

以前「『ボヴァリー夫人』における３つの時」と題して，「ボヴァリー夫人」の中では３つの＜時＞－temps linéaire, temps récurrent, temps immobile－が存在すること，またその関連性について構造的に考察してみた。

今回は同じく「ボヴァリー夫人」の中で＜時＞の描写にはどのような特徴が見られるかについて，モーパッサンの「女の一生」，バルザックの「ウジェニー・グランデ」と対比しながら検討してみたい。

フロベールの，特に「ボヴァリー夫人」における描写は narration を止めるものというのが通説であった。代表的なものとしてはリカルドゥーの *Problèmes du nouveau roman* (Seuil, 1967) における図式があげられよう（P165）。ここでは描写は récit の流れを完全に止めるもの－ degré zéro －とみなされている。＜la description se plaît souvent à *immobiliser* les personnages＞[(1)] とリカルドゥーは述べている。これは ＜c'est aux dépens du cours temporel de l'action que la description s'institue＞[(2)]という一節からもわかるようにactionの観点からの論述であり，Mieke Balも言うようにバルトの考え方と一致するものである。＜Le modèle de Barthes ne rend compte que de structure narrative, autrement dit de la série d'événements. Ses critères pour le repérage des noyaux sont formulés en termes d'analyse de l'action＞[(3)]

一方「ボヴァリー夫人」の描写そのものの中に見られる＜時＞について全体的に論じたものは（部分的にchronologie や作中人物の年令への言及について論じたものはあるが），見あたらない。

「ボヴァリー夫人」における描写に見られる＜時＞を検討するにあたり，P. Danger

がその *Sensations et Objets dans le Roman de Flanbert* (Armand Colin, 1973)で論じているように，「人物描写」≪Portraits≫，「もの」≪Objets≫，「自然」≪Nature≫ の3つに分けて考察してみたい。またこの考察に当たり，モーパッサンの「女の一生」，バルザックの「ウジェニー・グランデ」を「ボヴァリー夫人」と対照させるために選んだのは以下の理由による。

1)　これらの作品をそれぞれの作家が書いた年令がほぼ一致すること

フロベールが「ボヴァリー夫人」を書いたのは30～36才の時，モーパッサンが「女の一生」を書いたのは彼が33才の時，バルザックが「ウジェニー・グランデ」を書いたのは彼が34才の時である。

2)　作品のテーマがほぼ同じであること

3つの作品ともに，エンマ・ボヴァリー，ジャンヌ，ウジェニーという女主人公を中心にした「女の一生」－特に結婚－がテーマになっており，社会的スティタスは同じとはいえないが田舎で物語が展開し，それが作品の中で重要な位置を占めている。

3)　いずれも客観的に3人称で書かれていること

バルザックの作品の中で，ほぼ同時代の「谷間のゆり」（作者36才の時）を選ばなかったのは主としてこの作品が1人称の告白小説であることによる。

I

まず「人物描写」にみられる<時>の描写の特徴について検討してみよう。

①　「ボヴァリー夫人」におけるchronologie についてはGothot-Merschが *Aspects de la temporalité dans les romans de Flaubert* (*Flaubert la dimension du texte* 収録論文）(*Manchester University Press, 1982*）と題する論文の中で述べているように，研究例が多い。要するに「ボヴァリー夫人」の中では実際何年の月日が経っているのか正確に指摘することはできない（そしてこのことはフロベールの<時>についての考え方に深くかかわっているのではないだろうか）。作品の中に登場する西暦によると，シャルルの父が結婚したのが1812年頃であり，作品が終るのは2月革命以前，つまり7月王制（1830～48）の間であることがわかるにすぎない。シャルルがエロイーズと結婚していた期間は14ケ月[4]，1年の後シャルルはエンマと再婚するがその結婚生活は7年で終る。つまり少なくとも35才以下で死ぬシャルルの一生の中で，その2つの結婚期間約10年間が詳しく述べられていることになる。

それでは比較対照することになる他の2作品についてはどうであろうか？　モーパッサンの「女の一生」については1819年に始まり1853年までの34年間，バルザックの「ウジェニー・グランデ」は1819年より－<En 1819, vers le commencement de la soirée, au milieu du mois de novembre>(5)－1829年までの10年間－物語が始まる時ウジェニーは23才(6)だが，彼女は物語の最後で33才で未亡人になったと述べられている(7)－というように，いずれも作品の中に明示されている。3作品の chronologie が同じでないことは念頭においておく必要があろう。

②　次に考えられるのが<年齢>についての言及である。フロベールの Scénarios においては登場人物の年齢が明示されているにもかかわらず，作品においてはそれらが削除されていることはこれまでしばしば指摘されてきた（まるで，フロベールが最初登場人物を想像する場合，年齢は必要条件と考えているような印象を与えるにもかかわらず）。図(I)を見てみよう。「ボヴァリー夫人」において登場人物たちの年齢が明らかなものとそうでないものの割合は半々であるが，しかしながら人間一人の一生を取り扱っている作品において，肝心の主人公たちの年齢が不明なのは特筆されるべきであろう。バルザックの作品においては主要な登場人物はすべて年齢が明示されているし，モーパッサンの小説においても冒頭でジャンヌとロザリーの年齢ははっきりと述べられている。後の2者においては歴史的位置付けも明確である。「ウジェニー・グランデ」については<Cet événement eut lieu en 1806. Monsieur Grandet avait alors cinquante-sept ans, et sa femme environ trente-six. Une fille unique, (...) était âgée de dix ans>(8)，「女の一生」についても1819年にジャンヌ17才，ロザリー18才と明記されている。

③　それではその他のVisage, Vêtements などについての言及はどうであろうか？「ボヴァリー夫人」において人物描写に<時の経過>を示すもの，すなわちその人の歴史そのものを示しているような老人の描写は2箇所みられるだけである。一つは放蕩の生活を送ったラヴェルディエール公爵(9)，もう一つは農業祭で表彰された老婆である。

> <Son visage maigre (...) était plus plissé de rides qu'une pomme de reinette flétrie, et des manches de sa camisole rouge dépassaient deux longues mains, à articulations noueuses, (...) et, à force d'avoir servi, elles restaient entrouvertes, comme pour présenter d'elles-mêmes l'humble témoignage de tant de souffrances subies. (...) Ainsi se tenait (...) demi-siècle de servitude> (10)

図(Ⅱ)を見てみよう。「ボヴァリー夫人」においては「老齢」に関する言及は稀で，その描写は画一的である。シャルルとエンマに関する描写が示しているように，物語が展開する7年間であれ，その後であれ何も変わるものはないような静かな生活の中で，彼ら主人公だけが確実に時の烙印を押されていく[11]。

これを他の2作品と比べてみるとどうであろうか？「女の一生」においては34年間という長さのせいもあろうが，déformerする＜時＞のテーマが明らかに見られる。ジャンヌも，男爵夫妻，老召使い，犬に至るまで老いてみにくい姿をさらすことになる。一方「ウジェニー・グランデ」の中ではむしろ＜時＞は足踏みしているように思われる。その代表的な例がナノンとデ・グラッサン夫人である。以下の引用は最初のものがナノンについて，後の方が銀行家夫人についてのものであるが，双方に登場する＜conservée＞という言葉は注目に値するのではないだろうか？

＜Quoiqu'elle eût cinquante-neuf ans, elle ne paraissait pas en avoir plus de quarante. Ses gros traits avaient résisté aux attaques du temps. (...) elle s'est *conservée* comme dans de la saumure＞ (12)

＜Madame des Grassins était une de ces petites femmes vives, dodues, blanches et roses, qui, grâce au régime claustral des provinces et aux habitudes d'une vie vertueuse, se sont *conservée* jeunes encore à 40 ans＞[13]

（イタリック体筆者）

またこの足踏みしているような＜時＞はグランデ氏やその夫人の衣服の描写にも示されている。

＜Toujours vêtu de la même manière, qui le voyait aujourd'hui le voyait tel qu'il était depuis 1791＞ (14)

＜Madame Grandet mettait *constamment* une robe de levantine＞ (15)

（イタリック体筆者）

「ボヴァリー夫人」の中で，特にエンマは衣服をしばしば変えるが，それらがそれだけで時間の推移を暗示することはない。また「女の一生」では衣服への言及は少なく，＜Il ne quittait plus, bien qu'il fût tigré de taches, un vieil habit de chasse en velours＞[16]という，バルザックの作品に似た一節も＜時＞の流れを止めるという

よりはジュリアンの悋嗇ぶりのみを示しているにすぎない。

もちろんグランデ老人は物語の10年目には病弱になり死んでしまうのであるが，この作品において登場人物は背の高さや年令に比べて，<時>の経過の跡をその姿かたちにとどめていないようである。

それでは<時計>に対する「ボヴァリー夫人」の登場人物たちー主としてエンマであるがーの態度はどうであろうか？「女の一生」において<時計>は人間の喜怒哀楽や生死とは関係のない<時の流れ>を表している。母の死の床でチクタク動いている時計はその典型的なものである。一方「ボヴァリー夫人」の中では<la pendule battait toujours>[17]，<Elle entendait le battement de la pendule>[18]といった，モーパッサンの作品と同じような人間の生死とは関係のない<時の流れ>を表しているものもあるが，大部分はバルザックの作品に見られるように単に<時間>を知るためのものであったり，ものを置いたり隠しておく一種の「入れもの」であったりするにすぎない。モーパッサンにとっては時計についている<みつばち>もチクタクと同様重要なのだが，フロベールにとってはむしろ<音>こそが重要性をもっているように思われる。

Ⅱ

つぎに<もの>に見られる<時>の描写について検討してみよう。

これには①<次第に磨滅していく≪もの≫>のタイプと，②<その古さにより歴史を物語る≪もの≫>という2つのタイプが考えられよう。

フロベールの「ボヴァリー夫人」の中で①のタイプは有名な≪curé de plâtre≫[19]であろう。この坊さんは次第に風化し[20]，最後には引越しの途中でこわれてしまう[21]。同じような例は「女の一生」にも見られる。男爵夫人がすわっていたベンチである。<≪son≫ banc>[22]は彼女の死んだ後忘れ去られ，レ・プープルをジャンヌが去る前にはすでに「虫にくわれて」[23]いたが，2，3年後かつての自分の家を訪れた時彼女は母のベンチの残骸を発見する。

> <Un petit morceau d'une branche morte tomba sur sa robe, elle leva les yeux; il venait du platane. (. . .) Son pied heurta, dans l'herbe, un morceau de bois pourri; c'était le dernier fragment du banc, où elle s'était assise si souvent avec tous les siens, du banc qu'on avait posé le jour même de

la première visite de Julien.＞ (24)

「ウジェニー・グランデ」についても「ベンチ」はしばしば登場するが，最初に裏庭の描写がなされている時には，それについての言及はない。シャルルとウジェニーは彼が海外に出発するまでの短い間，このベンチで恋を語り合う。[25]そのベンチに，シャルルが出発した後はグランデ老人がすわり，[26] 1827年には一人ぼっちになったウジェニーがすわって食事をすることになるのであるが，[27]モーパッサンの「ベンチ」のような風化作用は見られない。一方このような＜時＞の烙印を押されていくのは「石がき」である。このmurs（石がき）は物語が始まる頃すでにくずれかけていたのであるが，8年後にはコルノワイエーナノンの夫一が，くずれて下じきになる人がでるぞとくり返すまでに風化が進むことになる。[28]

②のタイプとしては古くさいがらくた以外で「ボヴァリー夫人」に言及されているものはシャルルの「医学辞典」であろう。＜Les tomes du *Dictionnaire des sciences médicales,* non coupés, mais dont la brochure avait souffert dans toutes les ventes successives par où ils avaient passé＞[29]これは「女の一生」や「ウジェニー・グランデ」と比べるとはるかに少ない。「女の一生」では前述した＜時計＞以外にもジャンヌの部屋を飾るのはフランドル製のかべかけ，寝台などすべて物置きからとり出された年代ものである。

＜Le baron venait de le (l'appartement de Jeanne) faire remettre à neuf, ayant employé simplement des tentures et des meubles restés sans usage dans les greniers. (. . .) C'étaient ces meubles que chaque génération laisse dans la famille et qui font des anciennes maisons des sortes de musées où tout se mêle.＞ (30)

一方「ウジェニー・グランデ」における年代物はグランデ氏が家を買った時に一緒に含まれていたもの（trumeau, cartel, meuble en tapisserie, encoignures en bois de rose[31]）と，ウジェニーの祖父母からの贈り物－財布－[32]やうけついだもの－盆－[33]から成り立っている。

それでは＜建物＞についてはどのような特徴が見られるであろうか？フロベールは建物についても随所にその描写をしてみせるのであるが，個人の家についてはみすぼらしさに対する言及はあっても，＜時＞に関する言及は見られない。公証人の家，オメの家についても＜時＞を表わす描写はないし，ヨンヴィルでエンマが住む

ことになる家は新しくぬりかえられており，更にエンマが部屋を改造してしまう。<時>について言及されているのは公共の建物ー教会とか宿屋（侯爵の館を含む）ーに限られるようである。ヨンヴィルの教会は <L'église a été rebâtie à neuf dans les dernières années du règne de Charles X. La voûte en bois *commence à se pourrir par le haut,* et, de place en place, a *des enfonçures noires* dans sa couleur bleue>[34]，ルアンの hôtel de la *Croix rouge* については <bon vieux gîtes à balcon de bois *vermoulu*>[35]，ルフランソワの経営するヨンヴィルの宿屋では<au-dessus de la grande porte de l'auberge, le vieux lion d'or, *déteint par les pluies,* montre toujours aux passants sa frisure de caniche>[36]（イタリック体筆者），これらが<建物に刻まれた<時>の例になっている。これは一軒の家はそこに住む人の歴史を物語るものであり，「人が死ぬとその家もとりこわす」という東洋の古い習慣にフロベールが賛成していることと無関係ではないかもしれない。

「ウジェニー・グランデ」においてはどうであろうか？<人物描写>や<自然>に関する<時>の描写の貧弱さと対照的に，建物に関しては<時>の描写は多くみられる。最初のページを見てみよう。

> <Ici, des pièces de bois transversales sont couvertes en ardoises et dessinent des lignes bleues sur les frêles murailles d'un logis terminé par un toit en colombage que *les ans ont fait plier,* dont les bardeaux *pourris* ont été tordus par *l'action alternative de la pluie et du soleil.* (. . .) Là se présentent des appuis de fenêtre *usés, noircis,* dont les délicates sculptures *se voient à peine*> (37)
>
> （イタリック体筆者）

グランデ氏の家についても同様である[38]。部屋についても同様「古くささ」が強調されている。これに対して「ボヴァリー夫人」の中では部屋についても，バルザックにおける <les entredeux étaient remplis de blanc en bourre qui avait *jauni*>[39]（イタリック体筆者）といった<時>に関する描写は皆目みられず，エンマが理想とするのは<La table servie, deux réchauds d'argent, le bouton des portes en cristal, le parquet et les meubles, tout reluisant d'une propreté méticuleuse, anglaise>[40]（公証人の部屋についての描写）のような「安ぴか」でも新しいもので飾られた部屋である。

「女の一生」の作品の中では，すべてが古びてかびている。レ・プープルに関する描写を見てみよう。

＜C'était un de ces hautes et vastes demeures normandes tenant de la ferme et du château, bâties en *pierres blanches devenues grises*, et spacieuses à loger une race＞ (41)

あるいは，

＜Et la grande maison avait l'air de sonner le creux, toute morne, avec sa face que *les pluies maculaient de longues traînées grises*＞ (42)

（イタリック体筆者）

このように＜時＞を表す描写はあるが，モーパッサンにとって建物は大きくて，古びてものさびしいものにすぎない。レ・プープルを去って何年か後にジャンヌは再びその館を訪れる。＜Rien n'était changé au-dehors＞[43]永久に変わらないかのような建物と対照的に人ははかなくすぎ去っていくようである。

最後に＜物置き＞についてはどのように扱われているであろうか。

エンマは安びか物を買いあさり，不要になったものは＜物置き＞につみ上げられるか，こわれてすて去られるのみである。トストの彼女の家の＜écurie＞[44]は役に立たなくなったがらくたで一杯になっている。

一方ヨンヴィルの家の物置きが言及されるのは，エンマがロドルフからの別れの手紙を読む場所としてであり[45]，ロドルフの手紙を入れた書き物机があるのもそこであり[46]，競売の見張りが隠れているのもそこである[47]。ここでは＜物置き＞は倉庫とは別の役割－秘密の場所－を担っている。

他方モーパッサンの作品の＜物置き＞にはすっかり忘れ去られたものもあるが，再びとり出されて部屋を飾ることもある。ジャンヌにとっては思い出の品々をそこに見つけることができる[48]。

バルザックの作品にはこのような＜物置き＞への言及はない。

Ⅲ

次に＜自然＞の中に見られる＜時＞の描写の特徴についてここでは＜季節＞，＜水，音＞，＜光＞に限定して検討してみたい。

①＜季節＞について

主に植物の名を挙げて季節がいつであるか示す例は「ボヴァリー夫人」の中にかなり見られる。この作品においては四季の変化によってしか時の推移をおしはかることができないが，その重要な要素としてその季節に特有なものに言及されている。代表的な例はレオンがヨンヴィルを発った日，雨に押し流されるアカシアの花[49]である。フロベールはレオンがアカシアの花が咲く初夏にパリへ出発したことを暗示している。一方＜tonnelle＞についてはしばしば言及される[50]が，季節の推移を表すためではない。図(Ⅲ)から明白なようにフロベールは季節を表す植物・果物に対して博学であり，そのリストはモーパッサンに比べて多彩である。弟子の方はフロベールに比べると画一的な印象は否めない。（フロベールの登場人物が季節に対して敏感であったかどうかはまた別の問題であるが。）モーパッサンにおいても tilleul や platane はしばしば言及されるが，季節を表しているのは一箇所だけである。

＜le tilleul et le platane encore couverts de leur parure d'été semblaient vêtus l'un de velours rouge, l'autre de soie orange, teints ainsi par les premiers froids selon la nature de leurs sèves＞ (51)

少し後で，

＜Le plantane et le tilleul se dévêtaient rapidement sous les rafales. A chaque passage de la brise glacée des tourbillons de feuilles détachées par la brusque gelée s'éparpillaient dans le vent comme un envolement d'oiseaux.＞ (52)

これらは晩秋から初冬への移り変わりを微妙に表現している一節といえよう。バルザックについては，冬と晩春の石垣の描写で季節の推移を表している箇所があるが，双方の描写を比較すると季節を表す植物についての言及は少なく，重複さえしている。[53]（「谷間のゆり」においては有名な花束の描写があるが，これはむしろ例外というべきであろうし，一箇所でたくさんの花の名を列挙することがここで問題となっているのではなく，ある＜時＞＝＜季節＞を想起させるものが問題となっている。）余談ながらバルザックのこの作品では，一年の経過は＜収穫＞に集約されているように思われる[54]。

②＜水，音＞について

「ボヴァリー夫人」における＜川＞の表わす意味については他の箇所で言及した

ことがある。その中で <Elle (rivière) coulait sans bruit, rapide et froide à l'oeil>[55]のように<音もなく>流れ，<時の経過>を見せるものーシャルルがルアンで勉強を続けている時彼が窓からながめる<川>もこの類である。<il (Charles) ouvrait sa fenêtre et s'accoudait. La rivière (...) coulait en bas, sous lui, jaune, violette ou bleue, entre ses ponts et ses grilles>[56]ーと，聴覚に訴えるものがある。例えばロドルフとエンマが愛し合っている時（<Ils entendaient derrière eux la rivière qui coulait>[57]），エンマが死んだ時（<On entendait le gros murmure de la rivière qui coulait dans les ténèbres>[58]）聞こえてくる水音はいずれも人の喜怒哀楽や生死に関係ない<時の流れ>を示していることも以前に指摘したところである。

また<川>以外の <gouttes d'eau> についての言及もーシャルルとエンマが幸福に満たされている頃，エンマのひろげたかさの上に水滴がポツリ，ポツリと落ちたり，エンマが最後にロドルフに会いに出かける時も雪が溶けてポツリ，ポツリと草の上に落ちているのは，単に春の初めの情景という以上のものを暗示しているのではないだろうか。

特に次の一節は水滴が<時>と結びついていることを最もよく表わしていると言えるだろう。場面はエンマとレオンがルアンで水入らずの3日間を送る箇所である。

> <Les avirons carrés sonnaient entre les tolets de fer; et cela marquait dans le silence comme un *battement de métronome*, tandis qu'à l'arrière la bauce qui traînait ne discontinuait pas son petit clapotement doux dans l'eau> (59)
>
> （イタリック体筆者）

P. Danger も <la faculté auditive est la plus développée dans le tempérament de Flaubert>[60]と述べた後，<bruit continu de l'eau>に触れ，これらは「すぎゆく時」を示しているということと共に<ces instants d'apaisement où la présence des choses semble refluer pour laisser le champ libre à l'envol du rêve>[61]を表していると論じているが，<水音>がすべて<安らぎの時>を示しているわけではないことは上述の例からも明らかであろう。

一方<雨>についても<時>の経過を示していることはしばしば指摘されてきた。フロベールのこの作品においては<雨>の描写はほとんど見られないのであるが，レオンが去ったばかりの次の描写はその唯一の例と言ってよい。

<Mais une rafale de vent fit se courber les peupliers, et tout à coup la pluie tomba; elle crépitait sur les feuilles vertes. Puis le soleil reparut, les poules chantèrent, des moineaux battaient des ailes dans les buissons humides, et les flaques d'eau sur le sable emportaient en s'écoulant les fleurs roses d'un acacia.
—Ah! qu'il doit être loin déjà! pensa-t-elle.> (62)

一方同じ<雨>の描写でもモーパッサンにおいては<時>に対する配慮は見られない。冒頭の「昨夜からふりつづく」[63]しのつく雨は<時の経過>を示すよりは<時>まで洗い流しそうないきおいであり，ジャンヌの修道院から解放されたよろこびにはどしゃ降りもたちうちできないことを表しているにすぎない。「女の一生」には<川>はなく，代わりに<海>が常に女主人公を見守っているように思われるが，<海>は<時>の経過には無関係であろう。

「ウジェニー・グランデ」では<川>は「ポプラを植える場所」として言及されているにすぎない。もちろん<雨>についての描写もない。

③<光>について

「ボヴァリー夫人」においては<光>についての描写はあるが，その中で<時の推移>に関係しているものは少ない。例えばルアンの大聖堂の描写で <la lumière qui arrivait obliquement sur la cathédrale posait des miroitements à la cassure des pierres grises>[64]は光のいわば espace 化を表しているように思われる。（余談ながら<時の推移>が espace 化された例としては <le bourg paresseux (...) a *continué* (...) *à s'agrandir* vers la rivière>[65]，あるいは <D'année en année son petit champ *se rétrécit*>[66]（イタリック体筆者）などが挙げられよう。）図(Ⅳ)からもわかるようにフロベールにおいては「夜が白んでいく」といった<光>が時の推移を表す描写はあまりなく，またそれは窓にうつる光であることが多い。これはモーパッサンの夜明けの詳細で印象的な描写には及びもつかない。一方バルザックには一箇所それらしい箇所が見られるだけである。

結　　論

以上に述べたことを整理してみよう。

＜時＞に関する描写	ボヴァリー夫人	女の一生	ウジェニー・グランデ
＜人物描写＞	少ない	多い	少ない（年齢については正確）
＜もの＞	少ない	多い	多い
＜自然＞	＜音＞についての描写重要	少ない（＜光＞に関するもの印象的）	少ない

このように3人の作家には＜時＞に関してそれぞれ強調する分野があり，またそのことが彼らの特徴をよく表わしている。バルザックにおいては，年齢・年代の描写がほとんどであり，彼にとっては＜時＞＝歴史を意味するということが解る。一方フロベールとその弟子のモーパッサンは非常によく似た＜時＞の考え方をしているように思われるが，モーパッサンは人を déformer していく時と，一年毎によみがえる自然，人の変化に比べて「不動」ともいえる，「がらんとだだっ広い建物」を対置し，人の一生のみじかさ，「歴史」とは異なる「人生」を暗示しているように思われる。＜時＞＝＜歴史＞という姿勢はバルザックほど顕著とはいえない。

ところでフロベールの「ボヴァリー夫人」の登場人物ー特にエンマーは時の経過に敏感であり，＜時＞そのものがこの作品のテーマともいえるのであるが，描写の観点からはその＜時＞はどのように表現されているだろうか？エンマたちの＜時＞の感覚に平行したものであろうか？年令や年代についての描写が他の作家に比べて少ないことは前述した。＜時＞＝＜歴史＞とフロベールは考えているのではなさそうである。Gothot-Mersch は前出の論文の中で，フロベールは肖像画に書きこむ侯爵の祖先の命日について scénarios の中で迷い[67]，またルアンの教会の場面ではディア・ヌ・ド・ポワチエの年代についていろいろ書きかえた後で最後に歴史的に正確な日付を与えていることを指摘している[68]。

一方建物については＜時＞に関する描写が個人の建物については皆無である。＜もの＞についても，たとえばエンマが母や祖母からうけついだものには全く言及されていない。エンマは心理的にも，社会的にも，地理的にも孤立していることは他の箇所で述べたが，また彼女は＜歴史＞的にも孤立しているといえるのではないだろうか。

＜自然＞については人間の歴史とは無関係な，刻々と時をきざむ，一瞬ごとにすぎ去っていく＜時＞にフロベールは関心をもっていたように思われる。エンマはシ

ャルル，レオン，ロドルフと恋愛をし，いずれも真の幸福に達したと錯覚するのであるが，その幸福な時には必ず，雪どけ水がポツリポツリとかさに落ちる音がしたり，＜時の流れ＞を象徴する＜川＞ぞいに散歩しているのも単なる偶然とはいえないようである。

モーパッサンは＜光の変化＞に敏感であったが，フロベールは＜音＞による時の変化に敏感であったように思われる。そしてフロベールはモーパッサン同様，Histoire（歴史）とは別の＜時間の流れ＞(cours) に関心を抱いていたことが描写の点からも明らかである。

註

1) Jean Ricardou, *Problèmes du nouveau roman,* Seuil, 1967, p. 165
2) *ibid.*
3) *Flaubert la dimension du texte,* Manchester University Press, 1982, p. 179
4) *Madame Bovary,* Garnier, 1971, p. 35
5) Balzac, *Eugénie Grandet,* Gallimard-folio, 1972, p. 39
6) *ibid.*, p. 41
7) *ibid.*, p. 217
8) *ibid.*, p. 24
9) *Op. cit.*, p. 50
10) *ibid.*, p. 154–155
11) *ibid.*, p. 63, p. 129
12) *Op. cit.*, p. 193
13) *ibid.*, p. 46
14) *ibid.*, p. 29
15) *ibid.*, p. 41
16) Maupassant, *Une vie,* Gallimard-folio, 1974, p. 108
17) *Op. cit.*, p. 118
18) *ibid.*, p. 322
19) *ibid.*, p. 33
20) *ibid.*, p. 66
21) *ibid.*, p. 90

22) *Op. cit.*, p. 173
23) *ibid.*, p. 238
24) *ibid.*, p. 265
25) *Op. cit.*, p. 145, p. 149
26) *ibid.*, p. 178
27) *ibid.*, p. 203
28) *ibid.*
29) *Op. cit.*, p. 33
30) *Op. cit.*, p. 35, p. 36
31) *Op. cit.*, p. 35
32) *ibid.*, p. 136
33) *ibid.*, p. 58
34) *Op. cit.*, p. 73
35) *ibid.*, p. 226
36) *ibid.*, p. 75
37) *Op. cit.*, p. 20
38) *ibid.*, p. 33
39) *ibid.*, p. 34
40) *Op. cit.*, p. 308
41) *Op. cit.*, p. 34
42) *ibid.*, p. 122
43) *ibid.*, p. 265
44) *op. cit.*, p. 33
45) *ibid.*, p. 210–11
46) *ibid.*, p. 301
47) *ibid.*, p. 302
48) *Op. cit.*, p. 239
49) *Op. cit.*, p. 124
50) *ibid.*, p. 127, p. 173, p. 215, p. 222, p. 258, p. 356
51) *Op. cit.*, p. 104
52) *ibid.*, p. 107
53) *Op. cit.*, p. 75, p. 178
54) *Op. cit.*, p. 21
55) *Op. cit.*, p. 97

56) *ibid.*, p. 11
57) *ibid.*, p. 173
58) *ibid.*, p. 336
59) *ibid.*, p. 262
60) P. Danger, *Sensations et objets dans le roman de Flaubert*, Armand Colin, 1973, p. 227
61) *ibid.*, p. 309
62) *Op. cit.*, p. 124
63) *Op. cit.*, p. 30
64) *Op. cit.*, p. 244
65) *ibid.*, p. 72
66) *ibid.*, p. 75
67) *Op. cit.*, p. 41
68) *ibid.*, p. 42–43

図(I)

		ボヴァリー夫人	女の一生	ウジェニー・グランデ
創作時の作者の年齢		30～36才	33才	34才
chronologie		10年間	33年間	10年間
		(1812～1848)	(1819～1852)	(1819～1829)
年齢	言及されている人々	ルオー 50才(P15) エロイーズ 45才(P12) フェリシテ 14才(P61) オメ夫人 30才(P98) レオン 20才(P98) ロドルフ 34才(P133) カニヴェ医師 50才(P186) テオドール 40才位(P197) ジュスタン フェリシテより6才若い(P193)	ジャンヌ 17才(P28) ロザリー 18才(P30) リゾンおば 42才(P70) ロザリーの夫 22～5才(P155)	グランデ 70才(P24) ウジェニー 23才 グランデ夫人 49才 オ判所長 33才(P30) アドルフ・デ・グラッサン 23才(P30) ナノン 57才(P36) グラッサン夫人 40才位(P46) シャルル・グランデ 22才(P52)
	言及されていない人々	エンマ シャルル イベール イポリット オメ ビネ ルルー ブルジニアン神父 など	男爵夫妻 司祭 ラマール子爵 フールヴィル夫妻	クリュショ公証人 クリュショ神父 デ・グラッサン氏

図(Ⅱ)

ボヴァリー夫人	女の一生	ウジェニー・グランデ
Rouault ≪chauve sur le devant de la tête≫ (P15) duc de Laverdière ≪ce vieil homme à lèvres pendantes≫ (P50) Charles ≪Il prenait, avec l'âge, des allures épaisses≫ (P63) ≪les rides de son visage≫ (P302) Lheureux ≪chevelure blanche≫ (P105) Bournisien ≪barbe grisonnante≫ (P115) notaire Guillaumin ≪crâne chauve≫ (P308) conseiller de préfecture ≪chauve sur le front≫ (P144) Emma ≪Pour s'être découvert trois cheveux gris sur les tempes, elle parla beaucoup de sa vieillesse≫ (P129)	baron ≪Il sourit, secoua ses cheveux déjà blancs≫ (P29) ≪Le baron revint vers le mi-nombre. Il était changé, vieilli, éteint, baigné dans une tristesse noire qui avait pénétré son esprit≫ (P198) ≪le baron qui se courbait peu à peu et marchait ainsi qu'un petit vieux, les mains rejointes derrière son dos comme pour s'empêcher de tomber sur le nez≫ (P222) baronne ≪Elle avait été fort jolie dans sa jeunesse et plus mince qu'un roseau≫ (P47) ≪La baronne, en ces six mois d'hiver, avait vieilli de dix ans. Ses joues énormes, flasques, tombantes, s'étaient empourprées, comme gonflées de sang≫ (P172) Jeanne ≪de mois en mois elle devenait une vieille femme≫ (P222) ≪Les cheveux de Jeanne, gris déjà, étaient devenus blancs≫ (P226) ≪Rosalie, contemplant cette femme à cheveux blancs, maigre, fanée, qu'elle avait quittée jeune, belle, et fraîche≫ (P232) ≪Faible et traînant les jambes comme jadies petite mère, elle sortait au bras de sa servante qui la promenait à pas lents, la sermonait≫ (9235) chien ≪Gros comme une tonne, il se traînait à peine sur ses pattes écartées et raides≫ (P242) serviteurs ≪c'étaient maintenant de très vieux serviteurs, inutiles et bavards≫ (P242) tante Lison ≪Lison, qui ne vieillissait point, restée fanée dès son âge de 25 ans, avait l'air d'une soeur aînée≫ (p222)	Grandet ≪cheveux jaunâtres et grisonnants≫ (P29) ≪son front, plein de rides transversales≫ (P29) —これは老いより思慮深さを表しているようである abbé Cruchot ≪petit homme dodu (...) à figure de vieille femme≫ (P45)

図(Ⅲ)

ボヴァリー夫人	女の一生	ウジェニー・グランデ
géraniums (P35)	primevères (P146)	cheveux de Vénus (975, 178)
reines-chaudes (P43)	digitale (P59)	clochettes fleues (P75)
digitale (P45)	fleurs d' ajoncs (P44)	liserons (P178) (P33)
ravenelles (45, 97, 168)	coquelicots (P103, 270)	Sedum (P178)
coquelicots (946)	marguerites (P63, 103, 263)	convolvulus (P32)
poiriers (P22, 64)	pissenlits (P103)	cf. Quand le soleil atteignit un pan de mur, d'où tombaient des *Cheveux de Vénus* aux feuilles épaisses à couleurs changeantes comme la gorge des pigeons, de célestes rayons d'espérance illuminèrent l'avenir pour Eugénie, qui désormais se plut à regarder ce pan de mur, ses fleurs pâles, ses *clochettes bleues* et ses herbes fanées (75)
troènes en fleurs (P94)	pommiers (P263)	
véroniques (P94)	colzas en fleurs (P270)	
chèvrefeuilles (P97)		
clématites (P97)		
capucines (P127)		
pâquerettes (P140)		elle (. . .) se mettait à examiner le pan de mur où pendaient les plus jolies fleurs, d'où sortaient, d'entre les crevasses, des *Cheveux de Vénus,* des *liserons* et une plante grasse, jaune ou blanche, un *Sedum* trés abondant dans les vignes à Saumur et à Tours (178) (イタリック体筆者)
bruyères en fleurs (P163)		
seringas (P204)		
trèfles rouges en fleurs (P251)		

図(Ⅳ)

ボヴァリー夫人	女の一生	ウジェニー・グランデ
<la lumière (...) ne variait pas de la journée> (66) <Le jour blanchâtre des carreaux s'abaissait doucement avec des ondulations> (118) <l'aube blanchissait les carreaux> (201) <Le jour commençait à se lever, et une grande tache de couleur pourpre s'élargissait dans le ciel pâle (...) les réverbères s'éteignaient> (298)	レ・プープルでの初めての夜明け <Et elle resta longtemps, longtemps, à rêvasser ainsi, tandis que la lune, achevant son voyage à travers le ciel, allait disparaître dans la mer. L'air devenait plus frais. Vers l'orient, l'horizon pâlissait. (...) dans l'immense voûte du ciel, blanchie insensiblement, les étoiles disparaissaient. (...) Jeanne soudain se sentit dans une clarté; et, levant la tête qu'elle avait cachée en ses mains, elle ferma les yeux, éblouie par le resplendissement de l'aurore> (40) 海上での夜明け <Le soleil montait (...) mais elle (la mer) eut comme une conquetterie et s'enveloppe d'une brume légère qui la voilait à ses rayons. C'était un brouillard transparent, très bas, doré, qui ne cachait rien, mais rendait les lointains plus doux. L'astre dardait ses flammes, faisait fondre cette nuée brillante; et, lorsqu'il fut dans toute sa force, la buée s'évapora disparut; et la mer, lisse comme une glace, se mit à miroiter dans la lumière> (57) (コルシカ旅行の際の夜明けも同様－P 88～89) 通夜の朝 <La nuit s'effaçait; les étoiles pâlissaient; c'était l'heure fraîche qui précède le jour. La lune descendue allait s'enfoncer dans la mer qu'elle nacrait sur toute sa surface. (...) Et voilà que le ciel devint rose, d'un rose joyeux, amoureux, charmant. Elle regardait, surprise maintenant comme un phénomène, cette radieuse éclosion du jour> (184–85)	<Un jour pur et le beau soleil des automnes naturels aux rives de la Loire commençaient à dissiper le glacis imprimé par la nuit aux pittoresques objets, aux murs, aux plantes qui meublaient ce jardin et la cour. (...) Mille pensés confuses naissaient dans son âme, et y croissaient à mesure que croissaient du dehors les rayons du soleil> (74)